ボストン補習授業校における指導力向上についての具体的な手立て

前ボストン日本語学校　教頭
神奈川県横浜市立都田小学校　主幹教諭　河　合　智　樹

キーワード：授業研修

１．はじめに

子どもたちの実態として、補習授業校に通う子どもたちのベースは現地校であるため、保護者の意識とは違い、永住の意識が芽生えている子どもたちもいる。そのような子どもたちは、なぜ日本語で学ばなければならないのかという意識があり、補習授業校での学びに前向きに取り組むことが難しい状態も見られた。また、クラス内では日本語のレベルが様々な子どもたちが学んでいるので授業での理解度、満足度の差が大きく、子どもたちの学習意欲を向上させる手立てが必要であった。

その現状の中で、先生方は子どもたちにとってよい授業にしたいという気持ちをもちながら、教育活動に取り組んでくれていた。

本校は組織上６つの部（幼稚部、小学校低学年部、小学校中学年部、小学校高学年部、中学高校部、日本語部）で構成されており、各部の代表が研修授業を実施している。よって参観を希望する教員は年間１回、研修授業を参観する機会が与えられている。また理事会では研修授業参観時の代講への予算措置等も認めており、研修の体制を整えることで、採用した教員の指導力向上を図ってきた。他の教員の指導を参観することは自分の授業の参考になっているようであったが、一度自分の指導パターンを身に着けてしまうと、研修をしてもなかなか自分の殻を破ることは難しい教員も見られた。

そのために、学習指導要領改訂に伴い、「言語活動を大切にする指導方法について」という明確なテーマを設定し、それについての研修を重ねることにより、子どもの学習意欲の向上を図る取り組みを行ってきた。ここでは、本校の全教員を対象とした研修について取り上げる。

２．ボストン補習授業校での当時の課題

(1) 自分の指導パターンに沿って教材を作成しているために、現行の指導要領に即した子どもに身につけさせたい力とは、ずれが生じている場合があった。また、「引き出す」指導よりも「教え込む」指導を優先する傾向も見られた。

(2) 研修授業で他のクラスの授業を見ても、検討する視点が定まっていなかったため、授業者のテクニックが注目されがちであった。

(3) 言語活動を意識した単元計画の立て方について研修が必要であった。

研修の様子

３．課題解決に向けて

(1) 研修のテーマを『子どもの学習意欲の向上～「読むこと」における単元を貫く言語活動の工夫』～と設定した。

(2) 職員会議後、全職員を対象に教頭が、言語活動「読むこと」の指導及び「単元を貫く言語活動」を意識した単元計画の立て方という内容を中心に講義を行い、本校の指導内容のベクトルの統一を図った。

講義資料例

「子どもの学習意欲の向上」のために

その１

キーワード　単元を貫く言語活動①

子どもたちにとって、どちらが楽しいですか？

Ｑ　①自分で買いたいものを決めて、それを買うためにおこずかいをためる。

　　②特に買いたいと思っていないものをプレゼントされる。

Ａ

（中略）

「大改造！！劇的ビフォーアフター」

例　４年　ごんぎつね

目標　場面や気持ちの変化を想像しながら読み、いろいろな感じ方があることに気づくことができる。

ビフォー　登場人物の気持ちの移り変わりや場面の様子が分かるように音読しよう。

アフター　「ごんぎつね」を読んでクラス内で感想交流会をひらこう！

以下略

※このような資料を教頭が作成して毎月１回研修を行った。

⑶ 年度末に設定している部内での研修実践交流会にてそれぞれのクラスで行った言語活動について報告をし、学年で言語活動一覧表を作成した。

⑷ 作成した一覧表を教頭経由でgoogle driveに保管し、教員が自宅でも授業計画および教材を作成できるように環境を整えた。また、次年度はそれを更新する形をとることで、どの単元にはどの言語活動が最適なのかを考えるとともに、子どもたちの言語活動歴を把握して取り組めるようにした。

４．教員の可能性をのばす

兼業している教員にとって土曜の授業のために準備をすることはとても大変である。

しかし、補習授業校の先生方は、子どもたちにとってよい授業にしたいという気持ちをもってくれていた。

先生方とともに子どもたちを育てるためには、授業において何の力を伸ばすことが子どもたちの学習意欲の向上を図ることにつながるのか、また、そのためには何を意識して単元計画を立てていくのかを派遣教員は常に具体例を交えて伝えていくことが大切であると考える。また、授業研修の時間を確保することで参観した教員同士が意見交換する場を設けることが常に職員室がない状態の補習校にとっては大切な場になることが分かった。そして、当たり前のことであるが派遣教員が授業を見に行き、よいところは本人に伝えて、それを研修で全体に広げていくことが指導力の向上につながると考える。